

第24回東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成29年11月14日(火曜日) 10時00分から11時00分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 青柳評議員、猪子評議員、太下評議員、川上評議員、仲道評議員
野田評議員、日比野評議員、吉本評議員、小池知事
- 4 議 事 (1) 「東京文化プログラム」の発信力強化について
(2) 「企画公募事業」及び「パリ東京文化タンデム2018」について
(3) 「東京芸術文化評議会部会の設置」について

5 発言内容

○**青柳会長** それでは、第24回「東京芸術文化評議会」を開催いたします。

皆様お忙しい中、ご出席いただき大変ありがとうございます。

今日は浅葉評議員、秋元評議員、大野評議員、キャンベル評議員、小山評議員、松任谷評議員、矢内評議員から、所用により欠席とのご連絡をいただいております。

また、小池知事におかれましては、公務により遅れるとのご連絡をいただいております。早速ですけれども、次第に沿って進めてまいりたいと思います。

今日の議事は、公表前の内容が含まれていますので、運営要綱に基づいて会議を非公開とし、後日、資料や議事録を公開したいと思いますが、いかがでございましょうか。ありがとうございます。

では、特に異議がないようですので、そのように進めさせていただきたいと思います。

ですので、恐れ入りますが、報道関係の方々におかれましては、ここでご退室をお願い申し上げたいと思います。

(報道関係者退室)

○**青柳会長** 本日は、冒頭申し上げましたとおりに知事が遅れていらっしゃる予定ですので、議事の順序を変えて進行させていただきたいと思います。

まず、次第に記載のあります議事(2)の後段にあります「パリ東京文化タンデム2018」から始めたいと思います。事務局の説明、よろしく願いいたします。

○**文化総合調整担当部長** 「パリ東京文化タンデム2018」について、ご説明いたします。

東京都とパリ市は、昭和57年に姉妹友好都市として交流を開始いたしまして、平成27年には文化を含みます5つの分野におきまして、緊密な交流、協力を行うことに合意をしたところでございます。

先般、小池知事のパリ出張の際には、その合意を踏まえまして交流、協力をさらに深めていくことを確認いたしまして、文化の面では2018年に東京都及びパリ市におきまして、交流事業でありますタンデムを実施することといたしました。

パリ東京文化タンデムですが、東京都、パリ市の両都市の文化交流の活性化に向けまして、フランスの公的文化機関でありますアンスティチュ・フランセを含みまして三者で協定を締結し、協力して事業を実施するものでございます。東京都といたしましても、東京都及びパリ市の文化施設等におきまして多彩な文化イベントを実施し、両都市の文化の魅力を世界に幅広く発信してまいりたいと考えております。

主な事業内容でございますが、スライド中ほどから下にかけて記載をさせていただきますが、まずパリにおきましては2018年、平成30年2月から4月にかけて、デジタルアートをテーマにしたフェスティバルと連携しまして、日本、フランスのアーティストが共演する事業を実施する予定でございます。また、秋にはパリ市庁舎前広場等におきまして、風呂敷をテーマに江戸・東京の文化や芸術などの魅力を発信するアートイベントなどを実施する予定でございます。

一方、東京都内におきましては、来年秋以降に事業を実施する予定でございます主な内容でございますが、アール・デコの魅力を伝える展覧会、音楽、演劇のパフォーマンス等、フランスの芸術文化を紹介する様々な事業を行うことを予定してございます。

説明は以上でございます。

○**青柳会長** ありがとうございます。

続きまして、議事（3）「東京芸術文化評議会部会の設置」について、事務局からご説明をお願いします。

○**文化振興部長** 「東京芸術文化評議会部会の設置」について、ご説明いたします。

資料をご覧くださいと思いますが、芸術文化評議会の設置を規定しています東京都文化振興条例では、評議会は、特定の事項を調査・審議するため、必要があると認めるときは専門委員または部会を置くとともに、関係者から意見を聞くことができるとしております。この規定に基づきまして、今期の評議会におきましては、こちらに記載のあります文化政策部会、東京文化プログラム推進部会を設置するものでございます。

それぞれの果たす役割でありますけれども、まず文化政策部会につきましては、オリンピック・パラリンピックが開催される2020年以降も見据えまして、中長期的な視点を持って都の文化政策の方向性について議論するものでございます。主な検討事項としましては、都立文化施設等の運営、文化事業の評価・検証を行う仕組みのほか、都の文化政策に関する事項を広く取り扱うことを予定してございます。

もう一つ、東京文化プログラム推進部会でございますが、東京文化プログラム全体を通じた目標や取組視点等を整理するとともに、各個別事業の位置づけを明確にしていきたいと思います。また、後ほどご説明いたします発信力強化の取組についても調査審議することとしており、2020年大会に向けまして大会気運の醸成に大きく貢献していくものでございます。

いずれの部会につきましても、その構成につきましては会長とご相談しながら、少数精

鋭の視点でもって検討を進めてまいりたいと思っております。

事務局からは以上でございます。

○青柳会長 ありがとうございます。

いずれも大変重要な案件ですけれども、後ほどもし時間があつたら色々ご質問なりご意見をいただきたいと思ひます。

次に移らせていただきまして、野田評議員と日比野評議員から、今年度行いました東京キャラバン及びTURNについての報告をいただきたいと思ひます。

まず野田評議員からよろしくお願ひいたします。

○野田評議員 最初にこちらの動画をみていただきたいと思ひます。今年、9月に京都の二条城で実施した東京キャラバンのダイジェスト版です。

(動画再生)

○野田評議員 2017年の東京キャラバンでは、「食」を取り入れました。開演前に、このようなパフォーマンスで唐門から入ってくる観客を出迎えるところから始まります。

これは京都祇園甲部の舞妓「豆千佳」さん、芸妓「佳つ菊」さん、そして村田製作所の最先端技術を駆使したチアリーディングロボットの共演です。

次はEGO-WRAPPIN ‘のヴォーカリスト中納良恵さんの楽曲を津軽三味線、和太鼓、チェロやバイオリンなどの弦楽器で演奏し、人間国宝の能楽師、津村禮次郎さんが舞いました。これは京都・祇園祭り鷹山保存会のお囃子方です。そのお囃子方に、2016年に訪れた仙台で出会った和太鼓グループAtoa. が混ざり演奏しました。こちらは、今回「書」で参加してもらった、甲冑を着て力強い書のパフォーマンスをする青柳美扇さんです。松たか子さんが朗読しているのは、私が作った小品「夏の魂の中で」です。魂という文字の中に「鬼」が住むというお話です。さらに、この朗読に続き、中納良恵さんと松たか子さんが、アカペラで「椰子の実」をデュエットしてくれました。お二人の歌声、波音と鈴の音、そしてその歌に南方で死んだ兵士をイメージした能楽師の舞が合わさり印象的なシーンになりました。

今年、京都のほかに、八王子、熊本でも東京キャラバンを実施しました。そちらは、コンドルズというパフォーマンス集団主宰、振付家・ダンサーでもある近藤良平さんにお願ひし、リードしてもらいました。八王子では「踊り」を中心に参加型のパフォーマンスを開催しました。単純に色々な踊りを踊るというよりも、時間的に古い時代、50年代から新しい2000年代の踊りという新旧の交わりと、別の横軸というのかな、空間的にも遠い土地である沖縄から東北までの様々な伝統的な踊りを混ぜ合わせて、例えば、パラパラと仙台のスズメ踊りを融合させた踊りを創作するなど、古今東西を「踊り」で体感するというようなキャラバンになりました。

久しぶりにキャラバンについてまとめてきたので少し話しますけれども、もともとの目的としては、オリンピックを文化の面でも盛り上げていくために、様々な文化イベントが

開催されていますが、2020年を超えて、その先に続いていく事が大事ではないかということから考え出した文化事業です。日本人はどうしても近視眼的で、オリンピックがあるとオリンピックまでを目標としてしまうので、その先に残る形のものはないかなということから始めました。

形態としては、ロンドンなんかで初夏になると街角に移動遊園地が来る。そうすると、そういうものが街中に作られる、そのプロセスを見ているだけでわくわくしてくる。そういうものの文化版ができないかなということで、文化サーカスを作りたい、そういう形ができないかなと。

東京キャラバンのコンセプトとしては、これは半分ダジャレなのですけれども、文化の「文」という字とキャラバンという“移動していく、文化サーカス”が移動していく場合の交通の「交」という字が非常に近いので、「文化とは交通である」というコンセプトで“文化サーカス”が移動し続けるのが面白いのではないかと。ただ、こういうものは軸がないとぶれやすく、何でもありになってしまうので、新しいものと古いものが交わる、“時間的な交わり”と、遠いものと近いものが交わるという“空間的な交わり”、この2点だけをしっかり押さえようということにしました。

沿革としては一番最初、2015年に実験的に駒沢のオリンピック公園で“東京キャラバン～プロローグ～”を開催したのが始まりなのですが、その時は現代アーティストの日比野克彦さん、彫刻家・名和晃平さんらが、とても力を入れてくれて、一緒に東京キャラバンを創作しました。16年に、小池知事が就任されてからが、“東京キャラバン”の展開も本格化され、リオデジャネイロから始まり、東北の仙台、南相馬でワークショップを行い、最終的には、ブラジル、東北で出会った表現者たちが、東京に集結し、各地で創作したパフォーマンスを融合させた唯一無二の文化サーカスを発表する形で、六本木アートナイトに参加しました。今年17年は、先ほどお話した通り、東京キャラバンin 京都（亀岡）としてまずは現地でワークショップを実施し、そこから生み出された東京キャラバンin京都・二条城と、八王子、熊本です。

今日の話の肝は、現在、感じている問題点なのですが、去年はリオで始めたものが最終的に六本木に向かっていくという1つの絵ができました。それは予算的に、リオから六本木までの予算配分をうまく調整することができる自由度があったからなのですが、今年は、例えば熊本の東京キャラバンに参加してくれるハイヤ踊りという伝統芸能をやる女子高生たちを京都の東京キャラバンに呼びたい。というときに、地方自治体ごとに、お金を出していることが問題となり、お財布のものが違うものだから、なかなか簡単に飛び越えられない。そういうところが簡単に、自由にできないものなのかなということが問題点の1つとしてあります。自由度です。様々な土地の表現者を巻き込み、参加してもらうために超えなければならない様々な壁がありますが、この予算に関する壁も、もっと簡単に調整できないのかなというのが問題点です。

2つ目は規模の問題なのですけれども、これは認知度とも関係するのですが、前々回に秋元康さんが、「東京キャラバンの素晴らしい取り組みに対して、これは知られていないだろう、そこが一番問題なのではないか」と、仰られていましたが、そのとおりだと思います。そうするためには、まず規模的に、最終的に2020年に向けて、まずは、数を増やさなければいけない。理想は、2020年のピークには週末ごとに、色々な場所で東京キャラバンが開催されているという、そういうことが広がりをもつ1つなのではないか。それは多分、予算そのものと関係してくるのだと思うのですけれども、開催する頻度や、規模を大きくしたい。

ただ、ひたすら自分が企画立案しているものだから、規模を大きくしてほしい。というのはひとりよがりになってしまうのですが、まずは、この取り組み自体を広く認知してもらわないといけないと思うのです。それが3つ目の問題点です。「東京キャラバン」は、いいものであると。そこを認知してもらうためには、今度は、このイベントを広く知らせるための広報活動のための宣伝や広告が重要になってきます。けれども、ここが公と呼ばれる機関が開催するうえで、一番弱いところというのかな。やはりそういう広報も含めて、1つの大きいイベントであり、企画である。ということを理解してもらわないといけないのかなと。

このようにしてやりました、こうしました、はい、結果どうでしたかという、その報告だけをずっと続けていても、本当の広がりは見えないのではないかと。実際に生で東京キャラバンを観た人たちは、1時間ぐらいの小品なのですが、バイオリンやライブ演奏などを普段は、聴く機会がないような人なんかも触れることができ、とても面白がっていました。子供たちにとっても、そういう東京キャラバンのようなものに出会って、見るのが、ほんのちょっとしたきっかけになれば、文化というのは遠いものじゃないよと感ぜてもらえるのではないかと思います。

ご報告でございました。

○青柳会長 ありがとうございます。

遠いものと近いもの、それから、古いものと新しいものをくつつけるって、なかなか摩擦があるのですけれども、こういうオリンピックなんかを目標としているときはくつつきやすいのですよね。だからそれをぜひよろしくお願いします。

それでは、次に日比野評議員、よろしくお願ひいたします。

○日比野評議員 TURNプロジェクトについて最近のご報告をいたします。

お手元に配付させていただいた2つの冊子、表紙がにぎやかな、こちらが2年前から始めた15年のドキュメントブックと、16年のドキュメントブックになります。

TURNプロジェクトをもう一度改めて簡単にご説明しますと、マイノリティ、障害者施設、色々それぞれの個人の背景で、社会の中で生活しにくいという方々のコミュニティにアーティストが交流し、滞在して、一般的にはそれがハンディだというところの視点

を、アーティストのそれぞれのその人らしさという視点で読みかえて、ターンさせて、それを発信していこうというプロジェクトになります。

拠点としては年に1回、TURNプロジェクト、1年間の各施設でのアーティストの交流した成果物を発信するTURNフェスというものを東京都美術館で行っております。ここでのドキュメントブックが今、配付したのになります。

そして昨年はブラジル、リオでのオリンピックをきっかけにして、東京都のリーディングプログラムであるTURNプロジェクトをブラジルでも展開しようということで、サンパウロの日系社会の協力を得て、サンパウロの4つの施設で展開していきました。そこでの評価もあり、この後、映像をお見せしますが、南米で始まった国際現代フェスティバルがあります。ビエンナーレ・スールというもので、ブエノスアイレスを中心にして南米の各地域、12の国、35の都市で広域的に展開しているソーシャルインクルージョンなどをテーマとして、新しい美術の役割を探る国際展になります。そのプログラムにサンパウロとリオでTURNのプログラムをちょうど見てもらいまして、今年招聘されました。

今年度の海外での展開は、東京藝術大学の支援も得て、ブエノスアイレスの大学との連携でTURNのコンセプトで展開いたしました。そのチラシ、リーフレットがこちらの薄い紙のリーフレットがありますけれども、こちらになります。ブエノスアイレスとリマ、アルゼンチンとペルーの2つの都市で7人のアーティスト。うち3人は日本人、あと4人は南米のアーティストですけれども、彼らがそれぞれの町のマイノリティのコミュニティ施設に交流し、そこでの成果物をブエノスアイレスの美術館、リマの美術館で、ちょうど先月まで展開しておりました。

その映像がありますので、ご覧ください。

(動画再生)

○日比野評議員 まず私がリサーチします。どのような施設があって、どのようなアーティストがいるのかというのを前もってリサーチして、そこに合うアーティストを選定して、セッティング。そのときに、それぞれの伝統工芸、日本の伝統工芸、今回、和菓子を持ち込んで施設の利用者たちと一緒に制作をするきっかけといたしました。

セバスチャンというのはもともとコロンビア出身で、今ブエノスアイレスに住んでいるけれども、チャキーラというコロンビアのビーズの工芸を取り込んで、CENTESという障害者支援施設でやりました。

カタオカさんは日系のアルゼンチン人です。絞りを脳障害のリハビリの病院で行い、それぞれの縛り方によって模様が変わってくる。

彼女はアルゼンチンの方で、ランダというレース編みの手法を、より障害を持った子たちでもやりやすいように大きな網にして、あちらとこちらでやりとりをしながら作っていきます。

岩田さんは折形という折り紙ではなくて、いわゆるのしとか、折ることによって気持ちを相手に伝えるという折形を取り込んで、障害施設に展開していきました。

これはアルゼンチンでの成果物を発表する美術館でのオープニングのときです。4人の方がTURNプロジェクトの展覧会で成果物を発表していき、会場には各施設、子供たちもおおり、脳障害の方々、障害を持った方々の障害者同士の交流も会場の中で行われていきます。

それぞれの施設で交流してきて、この後も継続して行っていけるように大学の支援とか、本体のこちらのTURNプロジェクトの協力も得て展開していきたいと思いますし、海外での展開、リオオリンピックで経験させていただいて、1つ特徴的に感じたのは、文化の広がり方というのはどうしても私たちがシルクロード的な、少しずつ西のものが東に、東のものが西にずれながら、それぞれの土地のらしさを展開していくのが文化なのだろうなという、文化のつながり方のひな形みたいなものを私たちは持っていたのですけれども、障害者施設に行くと地球の裏側のブラジルでも、日本の障害者施設と全く変わらない。スタッフの振る舞い方、利用者の方々のリアクションとか、だから世界中どこでも同じことが本当に起こっているという、それ同士をつなげることによって、逆にこれまでの文化の伝わり方とは違うものが見えてくるのではないかと考えております。

今、南米ですごくこのTURNプロジェクトが取り入れられているというか、日本だと施設同士が色々な専門性に分かれているのですけれども、逆に南米は区別するだけの予算がなくて、1つのところに色々な障害を持った方がいたりとかするのですが、そういうときにつなぎ役としてアートが入ってくるというのがとても理解されやすくなっているのかなとも考えておりますし、2020に向けて世界各国でTURNプロジェクトを経験したアーティストなり施設の方々なり支援している主催者の方々たちが、ぜひ東京で集まって、次なるアートの役割のような話をできる機会が設けられればいいと思いますし、今ちょうどTURNフェスというものを上野公園中心にして行っているのですけれども、3回目、まだ冊子はできておりませんが、アクセシビリティをテーマとして行いました。車椅子でも美術館が見られるように、視覚障害者、聴覚障害者でも文化催事が体験できるようにというアクセシビリティもありますが、外国の方とか、美術館、博物館、何となく敷居が高いなという課題に対してのアクセシビリティというものも充実させていけるようなことを、上野を中心にして文化施設がたくさんありますので、そこを中心にTURNプロジェクトというものが展開して、今、東京都美術館だけでやっていますが、上野の全体の文化施設に広がって、1個の東京の特色ある文化発信が上野で、池袋、新宿、色々ありますけれども、上野の1つのカラーとしてアクセシビリティというものもあるのではないかと考えております。

ありがとうございました。

○青柳会長 どうもありがとうございました。

非常に今、面白かったのは、日本でもどこでも共有性があるということです。文化というのは普通、相違であるとか交流であるとか刺激であるとかということだけれども、そうではない文化のあり方が、こういう障害者のところを見ているとつながっていく。ちょうど昔、ヨーロッパなんかではブルボン朝でもロマノフ王朝でも文化を共有していたのです。そういうものと似ている現象がありますね。非常に面白いですね。

今の野田評議員と日比野評議員のキャラバンとTURNのお話をお聞きになって、問題点も指摘していただきましたので、ご意見あるいはこういうふうにしたらどうかということ、何かありましたら、どうぞ。

○仲道評議員 私はこの場に参加させていただいて、ご本人からのご説明もいただいて、一番最先端の情報を知っているはずの人間で、そのアンテナも立てているはずなのに、日常生活の中でこの素晴らしいことにながあまり耳に入っていない。今こうやって映像で拝見すると、映像って物凄く強くて、なんて素敵と思うのです。その発信の仕方をもっと強く、映像も使用していったらいいかなと思います。また、こういった素晴らしいことをポスト2020にどのように都民に還元していくのかというところの視点を、これが素晴らしいということの説明責任の部分とリンクさせていくことが大切だと思います。今後の文化施策においてこれがどのように2020以降に変容して残っていくのかということを見据えながら進めていかれるといいのではないかと思います。

先ほど予算のことをおっしゃっていましたが、では東京都って一体何なのか。都という1つの県のようなものではあるけれども、日本の中において東京都が何を果たすのかということとも関係してくるのではないかと思います。そのあたりの先ほど最初にお話のあった政策部会の設置とも重なってくる事項だと思うのですが、オリンピックプログラムと東京都の文化施策、これからどうリンクさせて考えていくのかということ、しっかりと考えていかなくてはならないと思います。

(小池都知事入室)

○青柳会長 今のご意見は後につなげて、知事がいらっしゃいましたので、ここで小池知事からご挨拶をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○小池知事 評議員の皆様方、お忙しい中、本日はお集まりいただきましてありがとうございます。

先月28日ですけれども、ちょうど東京2020大会の1,000日前ということでイベントを各地で行ってまいりました。東京タワーに1,000日という数字が並んだり、日本橋のほうで大きなイベントを行ったり、お神輿を担いだりということで、これからますます盛り上げていく際に東京文化プログラムをさらに磨き上げて、そして2020年にピークが来て、かつ、そのピークからさらにその後も続くというような設計をしていきたいと思っております。

また、プログラムも誰もがこれは面白い、楽しいということを感じていただけるような、

そして、より多くの都民の皆さんが参加をしていただくという流れをぜひ作っていきたく
と思っております。

先日、パリにまいりまして、パリのイダルゴ市長と会談をいたしました。素敵な女性市
長でございます。文化をはじめとする4つの分野で交流、協力をさらに進めていこうとい
うことで一致しております。

ちなみにパリの後はロサンゼルスになりますけれども、ちょうどロサンゼルスのも市長も
その場におられまして、東京、パリ、ロサンゼルスということで、持続可能性であるとか、
同じメッセージをこれからもバトンでつないでいけるような大きな性（さが）といいまし
ょうか、流れを作っていきたくと思っております。

ちょうどパリとは来年の2018年に日仏外交関係160周年という記念であり、そし
て、パリ市と東京はシスターシティとして文化タンデムというイベントを開くことは皆さ
ん、既にご承知のとおりでございますが、ぜひ文化タンデムというイベントでパリを拠点
として江戸、そして東京の文化芸術など、これらの魅力を世界に発信していくことを、パ
リのイダルゴ市長とも、その流れでいきたいと思いますということを確認し合ったところでござ
います。

その意味でも、これからもコンテンツであるとかPRの仕方などなど、ぜひ皆様方のお
知恵をお借りし、また、実際にご協力をいただきたいと思っております。

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」というネーミングが1つのブランドと
して広く浸透できるようにしていきたいと思っております。この新しいバッジはTokyo T
okyoということで、青空のブルーを象徴しております。それから、習字のTokyo
とロゴの部分でOld meets Newというコンセプトになっております。真ん中
にぼちっと小さな印刷ミスみたいなものがあるのですが、これが渋谷のスクランブル交差
点をデフォルメして印鑑のような形にして、ちょっとしたアクセントにしてみました。渋
谷のスクランブル交差点を見ると「あっ、東京」と多くの外国の人は、それを認識する
ということから、このような形にいたしました。

ちなみに観光のボランティアの皆さんのユニフォームも、この色をベースにしなが
ら、このコンセプトをベースにしなが、背中にQRコードを背負っていただきまして、QR
コードはご承知のようにトヨタのデンソーという会社がありますけれども、あそこがも
と作ったシステムで、ですから日本発のシステムで、今QRコードで電子決済を済ませ
るとか、特にアジア地域でのQRコードの存在というのはかなり広がっているので、ぜひ
QRコードを活用しながら、そこにあるインフォメーションは、小さいことかもしれない
けれども、入ってみると奥深いということも含めて東京について、また日本について知ら
しめていきたくと思っております。

文化事業を盛り上げるためにも、様々な2次元、3次元の情報の発信を考えていきたく
と思っておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

また、川上評議員に今回加わっていただきまして、超会議って物凄いことをなさるのですよね。こういうアイデアがあるのかといつもびっくりさせられますけれども、またメンバーとしてどうぞご活躍のほどよろしく願いいたします。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、議事に戻りたいと思います。議事（１）は今、知事からもお話がございましたけれども、「東京文化プログラム」の発信力強化及び（２）前段の「企画公募事業」につきまして、２つ続けて事務局よりご説明をお願いします。

○魅力発信プロジェクト担当部長 では、東京文化プログラムの発信力強化についてご説明させていただきます。

６月２８日に開かれました前回の芸術文化評議会におきまして、川上評議員からインターネット時代のイベントについてプレゼンテーションをいただきました。その際、現在のネット時代におけるプロモーションのあり方やイベントのパッケージングなど、新たなご提案をいただいたところでございます。

東京都におきましては、２０２０年東京オリンピック・パラリンピック大会に向けた文化面での取組として、東京文化プログラムを実施しているところですが、今後さらなる気運醸成を図るため、これまで以上に東京文化プログラムの認知強化に取り組んでいきたいと考えております。

そこで、いただきましたご提案内容を踏まえまして、東京文化プログラムの発信力の強化について取りまとめましたので、ご報告させていただきたいと存じます。

（ＰＰ）

スライドの２ページ目、「東京文化プログラム」の発信力強化についてをご覧ください。

まず課題のところでございますが、これまでの東京芸術文化評議会で指摘されているように、東京文化プログラムがより多くの人から認知されるとともに、支持や注目を集めるためのPR戦略が弱いという現状がございます。加えて、今後２０２０年に向けてさらなる気運醸成を図るには、国内外に対し訴求力の高いプロジェクトの展開が必要となります。そのため、発信力を強化していく必要があると考えているところでございます。

そこで発信力強化の方針のところでございますとおり、国内外から注目が最も集まる２０２０年４月からの半年間に実施する東京文化プロジェクトを「T o k y o T o k y o F E S T I V A L」と銘打ち、これまでに予定しておりました事業に加え、新たな企画も加えるなど重層的なプログラムを形成し、集大成となる文化事業を展開してまいりたいと考えております。

また、２０２０年に向けての期間につきましては、認知強化、文化気運醸成を図るため、「R o a d t o T o k y o T o k y o F E S T I V A L」として国内外への発信や拡散力の強化に努め、盛り上げを図りたいと考えております。さらに、象徴となるロゴを作成して、ブランディングにも取り組みたいと考えております。

(P P)

上段が「Tokyo Tokyo FESTIVAL」、下段が「Road to Tokyo Tokyo FESTIVAL」のロゴとなっております。

これらのロゴを活用いたしまして、ブランディングに取り組んでまいりたいと考えております。

(P P)

この取組における主な戦略でございますが、東京文化プログラム全体のプロモーション戦略のもと、東京文化プログラムの各事業をショーアップされた発表会で定期的に情報発信するほか、象徴となる目玉イベントの実施につきましても検討していきたいと考えております。

(P P)

4ページ目のスライドをご覧ください。「Tokyo Tokyo FESTIVAL」に向けた具体的な取組・事業でございます。

緑色の新たに展開する象徴的なプログラム。オレンジ色の民間等に対する助成事業。青色の東京文化プログラムの土台となるプログラムに加えまして、一番上、薄紫色のブランディングプロモーション戦略が新たに加わり、各カテゴリの事業を含めた全体の発信力を強化してまいります。

各カテゴリの具体的な取組や事業につきましては、記載のとおりとなっております。後ほどお時間があればご覧ください。

ただいまご説明申し上げた方針に基づきまして、今後具体的な取組を進めてまいりたいと存じますが、今回の取組がプロモーションの強化に向けた取組であることから、その実施に当たりましては当該分野の知見に富み、ご経験豊富な川上評議員に、東京文化プログラム統括プロデューサーとして中心的な役割を担っていただきたいと考えております。

東京文化プログラム発信強化につきましては、以上でございます。

(P P)

続きまして、企画公募事業についてご説明いたします。

目的のところにありますとおり、先ほどご説明しました「Tokyo Tokyo FESTIVAL」を最高潮に盛り上げていくためには、中核となる目玉事業を創出していくことが必要でございます。そのため斬新で独創的な企画や多くの人々が参加できる企画を幅広く募っていきたいと考えております。

概要でございますが、個人・団体を問わず様々な分野から広く事業企画を募集し、採択した企画を東京都及びアーツカウンシル東京の主催事業として実施してまいります。1件当たりの委託費は2億円を超えない範囲で、企画の規模に応じて決めてまいります。

ラグビーワールドカップが行われる平成31年秋ごろから「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の期間に実施する事業を対象とし、おおむね20～30程度採択する

予定でございます。

(P P)

次のスライドにスケジュールをお示ししております。11月24日に実施の発表を行い、来年2月の1カ月間を受付期間とする予定です。その後、選考を行い、来年7月ごろには採択する企画を決定していく予定でございます。

なお、ただいまご説明いたしました「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の概要と企画公募事業の実施につきましては、11月24日金曜日の知事の定例会見での発表予定しております。そのため、本日ご覧いただいております資料内容につきましては、定例会見終了時まで公開は控えさせていただいております。

恐れ入りますが、評議員の皆様におかれましても、定例会見まで情報の管理にご協力をお願い申し上げます。

事務局からの説明は以上でございます。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、評議員の皆様から東京文化プログラムの発信力強化と企画公募事業の内容につきまして、ご意見やご指摘がございましたらいただきたいと思っております。

先ほど仲道評議員から発信力が非常に大切だ、それから、その規模を大きくしてやるべきだ、もう少し何かつけ加えることはありますか。今の東京文化プログラム及び企画募集等々に加えて。

○仲道評議員 発信は海外に向けてする方法と、国内の他府県に向けてする方法、東京都民の皆様にする方法という重層的なあり方があっていいと思います。先ほども映像を見て「あっ」と思うことが多いので、映像の力は十二分に活用なさったらいいと思うのと、先ほども申し上げましたが、発信するときに魅力的でしょう、素敵でしょうというだけではなくて、なぜそれをしているのか。それが2020以降にどのような意味を持つのか。だから東京都はこれをしているというところもしっかり発信していくことによって、東京の姿勢というものを理解して、それに価値を見出してもらえるのではないかと思います。

○青柳会長 ありがとうございます。

その点、川上さんいかがですか。

○川上評議員 今、仲道さんがおっしゃったように思っています、小池都知事には我々がやっている超会議というイベントを非常に高くご評価いただいたのですが、超会議という我々のイベントの特徴というものがあって、それは特に目玉コンテンツがあるようで実はないというところだと思います。

これは幕張メッセに2日間で15万人ぐらい集めるイベントなのですが、その中のどのコンテンツをとってみても、単独で開催すると恐らくは1万人すら集まらないようなものでしょう。ところが、超会議のパッケージングの中でやるとそれが非常に輝くというのが特徴だと思います。

例えば様々な人気のあるアーティストで、単独で東京ドームを埋められるようなアーティストというのは世の中にたくさんいるのだと思うのですが、恐らく東京文化プログラムに求められているのは、もともと民間でやっているのと同じようなイベントをやるというのが当然目的ではないのだと思います。例えば経済性、合理性ですとか、なかなか普通だとできないようなイベントを行うことが重要なのですが、そのときに集客力、世の中に対する認知度をどのように確保するのかというのが課題になってくるのだと思います。

そうしてみると、今の文化プログラムに欠けているのは、個々のイベントが、これが例えば東京都の文化プログラムだということをまず認知されていないのです。まず文化プログラムというものが存在するということが知られていない。しかもどうもその文化プログラムというものを宣伝しようとするにも、オリンピックという単語が使えないという極めて強い制約のもとで、それをどうやって国民に理解していただけるかという非常に難しいプロジェクトなわけなのですが、まず1つはそのための全体としての文化プログラムを説明するブランドが必要でしょう。それ自体をプロモーションする。そして、その中でイベントを一個一個ではなくて、それを全部パッケージングして、それはオリンピックに向けた文化の試みなんだということを説明する。そのようにすれば必ず認知は広がって理解も得られるのではないかと思います。

そのときに1つ重要なポイントだと思っているのは、イベント自体はあるものですが、オリンピック自体はスポーツのものです。その中で文化プログラムをなぜやるのか。気運醸成というのは都合のいい言葉なのですが、具体的にではどうやってそれを実現するのかということを考えますと、先ほどから野田さんも仲道さんもおっしゃっているとおり、2020年以降に残るものを作らないと意味がないと思っていて、それは普通だとできないようなことにトライするということが重要だと思います。この文化プログラムをきっかけに今までできなかったことができるようになった。ひょっとすると2020年以降もこのままできるようになるかもしれない。そういった従来色々な理由でできなかったことを実現していくことをやっていくのが大切ではないかと思っています。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

スポーツのほうだとより速く、より高く、より強くとか、競争原理が入っていて、そして、その記録は必ず破られていくわけです。だけれども、文化プログラムは色々な人たちが参加することによる参加意識と共有、感動というものを共有するんだという、ちょうどスポーツと対極にあるもの。これが一体になって全部の文化が完成していくのではないかという気がするのです。そういう意味で文化プログラムは非常に重要だと思うのですが、吉本さん、今の川上さんの意見や仲道さんの意見、それから、TURNキャラバンのことを考えながら何かありませんか。

○吉本評議員 確かに東京2020で文化プログラムがあるというのは、関係者の間では何となく知られているし、オリンピック憲章にも書かれているということはだんだん認知されていると思うのですけれども、例えば野田さんが熊本で東京キャラバンをやられたときに、その資料を見ると公認のロゴマークがついているのですけれども、一般の方が見ると、これがオリンピックを機に始まっているということはなかなか認知されていないのではないかと思います。

日比野さんのTURNは南米まで行ってやられているわけですが、それも東京2020があって始まっていることなので、やはり各イベントの中で、実はオリンピックがあるからこういうことができているんですということをアピールするような仕組みが必要なのではないかと思うのです。そのときに川上さんがおっしゃっていたような枠組みで、多くの人を巻き込んでということだと思います。

もう一つは、一般の方から見ると今までにない文化事業が行われているということがあっても、それがオリンピックであろうが、オリンピックでなかろうが、あまり関係ないと思うんですね。ですからそれ自体がすごく面白いというか、発信力があるというか、そのことが重要で、全体でプロモーションをすごくやると同時に、一つ一つの事業やプログラムを工夫して、こんなことができるのは実はオリンピックがあるからだということも分かるようにしていくという、全体をプロモーションすることと、一つ一つでプロモーションしていくこと、両方が必要なのではないかという気がしました。

この「Tokyo Tokyo FESTIVAL」は新しい魅力的なロゴですが、先ほどどなたかもおっしゃられたように、オリンピックとは言えないという制約がある。でも組織委員会は東京2020 Nippon フェスティバルというのも立ち上げられるということなので、別のものであってもよく一緒に出てくるようにするとか、実際に「Tokyo Tokyo FESTIVAL」も2020があるからできることなので、組織委員会との連携を強めることで、これもオリンピックがあるからできるんだということぜひアピールできたらいいのではないかと思います。

○青柳会長 ありがとうございます。

猪子さん、よくマッピングか何かでたくさんの人を惹きつけているのだけれども、そういうものも宣伝するために使えないですか。多くの人に知ってもらうために。

○猪子評議員 今の時代は、それそのものに力があると世界にそのまま届いて、世界中からそれは呼ばれることになると思うのです。だから、それそのものに力を持つことのほうが重要かもしれないです。今の時代というのは広告そのものの効果がグローバルにおいてはすごく低くなっていて、ユーザーが直接価値があるものを世界中に届ける。YouTubeもインスタグラムもグローバルなメディアなので、コンテンツに価値があれば一気に世界に広がるし、幾ら広告してもなかなか世界に届かないものは届かないかもしれないです。

○青柳会長 ありがとうございます。

太下さん、いかがですか。

○太下評議員 先ほど川上評議員から、2020年以降も残るものが非常に大事だという指摘があって、そのとおりだと思います。

ご案内のとおり、国際オリンピック委員会はレガシーという概念を非常に大事にしています。これはオリンピック本体もそうですし、文化プログラムもそうです。ですので、何が未来に継承できるのか、について改めて戦略的に考えてみる必要があると思うのですが、その際に参考になるのは2020年ロンドン大会であると思います。

ロンドン大会のレガシーは色々な説明の仕方ができますけれども、1つ特徴的なものを挙げるとすると、障害者による芸術表現の可能性を追求したアンリミテッドというプログラムでしょう。この中で、特にスー・オースティンという車椅子の女性ダンサーが水の中で踊るFlying Freeという、大げさに言うと人類がいまだかつて見たことがない美しいダンスを編み出したことによって、障害者の芸術表現というのは決して福祉ではない。新しい芸術領域なのだということが明確に打ち出せたのだと思います。

一方で東京という都市、さらには日本という社会の特徴を俯瞰して考えてみると、これも色々な説明の仕方があるでしょうけれども、世界で最も早く、最も大きな規模で超高齢社会に突入した都市であり国である。このように言えると思うのです。実際の新聞やテレビニュースで、毎日のように高齢社会に関するニュースはあります。例えば社会保障費の増大だとか、認知症の増大、高齢者による事故、残念ながら高齢社会に関するニュースはネガティブなニュースばかりなのです。あまりポジティブなニュースはないのです。

一方で、少子高齢とセットで語られますけれども、実は政策的に考えると決定的に違って、少子化という現象はある程度政策的に緩和というか対応可能です。子供を増やしていくということ、子供が暮らしやすい社会を作ることなど。一方で高齢社会というものは、政策的に例えば福祉医療で対応する、高齢者を暮らしやすくすると、高齢化はより進みます。つまり高齢というのは絶対に避けられない現象なのです。確実に来る。であれば、確実に来る社会をネガティブに捉えるのはすごく損なことだと思います。絶対に来てしまうのですから、また、避けようがないのですから、この高齢社会をいかにハッピーな社会にするのかというのが、すごく大きな課題だと思うのです。

先ほども申し上げたとおり日本、そして東京は世界最速、最も大規模に超高齢社会に突入するわけですから、文化芸術で高齢者をハッピーにする社会というものを提示できたら、これからフォロワーになる世界の国々、世界の都市が絶対に注目することになると思います。こういったことが東京から世界に示すべき戦略的なレガシーではないかと考えます。賑わいを演出するという意味では、フェスティバルや文化イベントという見え方も非常に大事だと思いますけれども、その根底にコンセプト、そして何をレガシーとして残すのかということを考えて上で、イベントやフェスティバルに取り組んでいくという姿勢が大事

ではないかと思えます。

○青柳会長 ありがとうございます。

東京は意外にとんでもない都市で、江戸時代のときに100万になっているわけです。世界で初めて100万になった都市の1つ、ロンドンと北京と東京で、それだけの都市としての歴史を持っているところで今、皆さんがおっしゃったような様々なことをやって、そして川上さんがしっちゃかめっちゃかにやっていくのと、一方で吉本さんがおっしゃるように組織委員会と政府と都が中心になって、がっちりこの文化プログラムを広げていく。そして都の場合にはキャラバンとTURNが既に先行してやっているわけです。だからそういう意味で盛り上げていけば、必ず成功するのではないかと思うのですが、この辺で知事の最後の話をいただいて、今日のあれにしたいと思えます。

○小池知事 ありがとうございます。活発なご議論で、かつ、ポイントは2020年以降もつながるといことだと思えます。おっしゃりましたように2012年のロンドン大会というのは、パラリンピックに特意的を当てつつ、そのコンセプトをずっと世界に知らしめ、かつ、今もそうやってレガシーとして記憶に残しているという点で、大いに学ぶところがあるかと思えます。

高齢化というか、「化」がなく超高齢社会なのですからけれども、これが芸術というかどうか分かりませんが、地域でフラダンスのおばさま方、すごいですよ。八十幾つの人たちがフラダンスをみんな踊っていたり、コーラスなんかでもすごいですよね。超高齢のコーラスの人たちというのはすごいパワーだと思いますけれども、そういう庶民のパワーというのは、何かうまく一緒に一体感を持って進めていければいいなと思えます。

これからそれぞれが独立したようなシステムというかセルを「Tokyo Tokyo FESTIVAL」という大きな風呂敷で包んでいただいて、玉手箱のように色々なものが飛び出してくるとい何かワクワク感を抱けるようなパッケージングといたしまししょうか、それを工夫していただきたいと思っています。

先ほども申し上げましたように、超会議をこれまでもなさってきた川上評議員には、東京文化プログラム統括プロデューサーということでご就任をお願いしたいという提案でございますけれども、ぜひそうやって川上さんが面白いと思うこと、それから、それを見た人たちが面白いと思うこと、そういったものは残ってくるし、伝播力もあろうかと思っております。

いいものを行っていても、知らないととてももったいないですから、いかに知らしめるかという点も先ほどのコンテンツの話につながってきます。色々な意味で総合的なプロデュース力が必要になってきますので、川上さん、ぜひともよろしく願い申し上げます。

また、評議員の先生方も、これからもどしどしとご意見をいただければと思っております。

○青柳会長 どうぞ。

○吉本評議員 知事の発言の後で申しわけないのですけれども、先ほどご説明のあった企画公募事業というのが重要だと思うのです。事務局からさらっと説明があったのですが、1件当たり2億円。若いアーティストやクリエイターのアイデアが素晴らしいものであれば、それだけの予算を投じてやろうということです。オリンピックの文化プログラムに発信力がないというのは、アーティストの間でオリンピックがチャンスだということがあまり認識されていないということもあるのだと思うのです。ですから企画公募事業の存在自体もぜひ川上さんに強くアピールいただいて、面白いことを考えている若いアーティストのアイデアを拾い出してきて、それで先ほど猪子さんがおっしゃったように、1個のコンテンツで世界にアピールするようなものを作ることにつながればいいなと思います。

この公募企画も「Tokyo Tokyo FESTIVAL」と一緒に、この先しばらくしてからのプレスリリースの予定だと思いますけれども、ぜひ知事からも、若いアーティストにとにかく応募してアイデアを出してちょうだいと呼びかけていただき、東京都は2億用意しているのですからということ、知事にアピールいただくのが、一番発信力があるのではないかと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

○日比野評議員 私も一瞬いいですか。ぜひ公募するときにコンテンツの公募と、コンテンツをつなぐアイデアとか、風呂敷とか超会議とかいうアイデアも出していいんだという呼びかけが必要な気がするのです。どうしても公募と言うとコンテンツで、箱で演目をと意識になりがちですけれども、それをつなぐことも1つのアイデアとして公募しますよというの必要なのかなと思います。

○野田評議員 この公募の方向性としては、要するに“東京キャラバン”なんかは、まさにその公募に応じなければいけないものなのだと思うのだけれども、先にやっちゃっているではないですか！ 今、日比野さんが言ったのは要するに、東京キャラバンみたいなアイデアをどんどん出してこい。ということですね。公募のときの一例として、“東京キャラバン”を挙げてもらえますか。例えばこういうものだと。

○青柳会長 どうも色々ありがとうございました。

64年のときのオリンピックでは、東知事、彼は公衆衛生の専門家だったのです。ですから実は高速道路とか何とかもあるのですけれども、東京の公衆衛生状況がべらぼうによくなったのです。それで世界で有名だった東京湾に垂れ流しをしなくなって、それで素晴らしくなった。今度はぜひ小池知事に文化の東京というものをオリンピックで確立させていただくことをお願いして、今日の評議会を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

以上